



ちょっとそこまで～お散歩日和（地域編）～



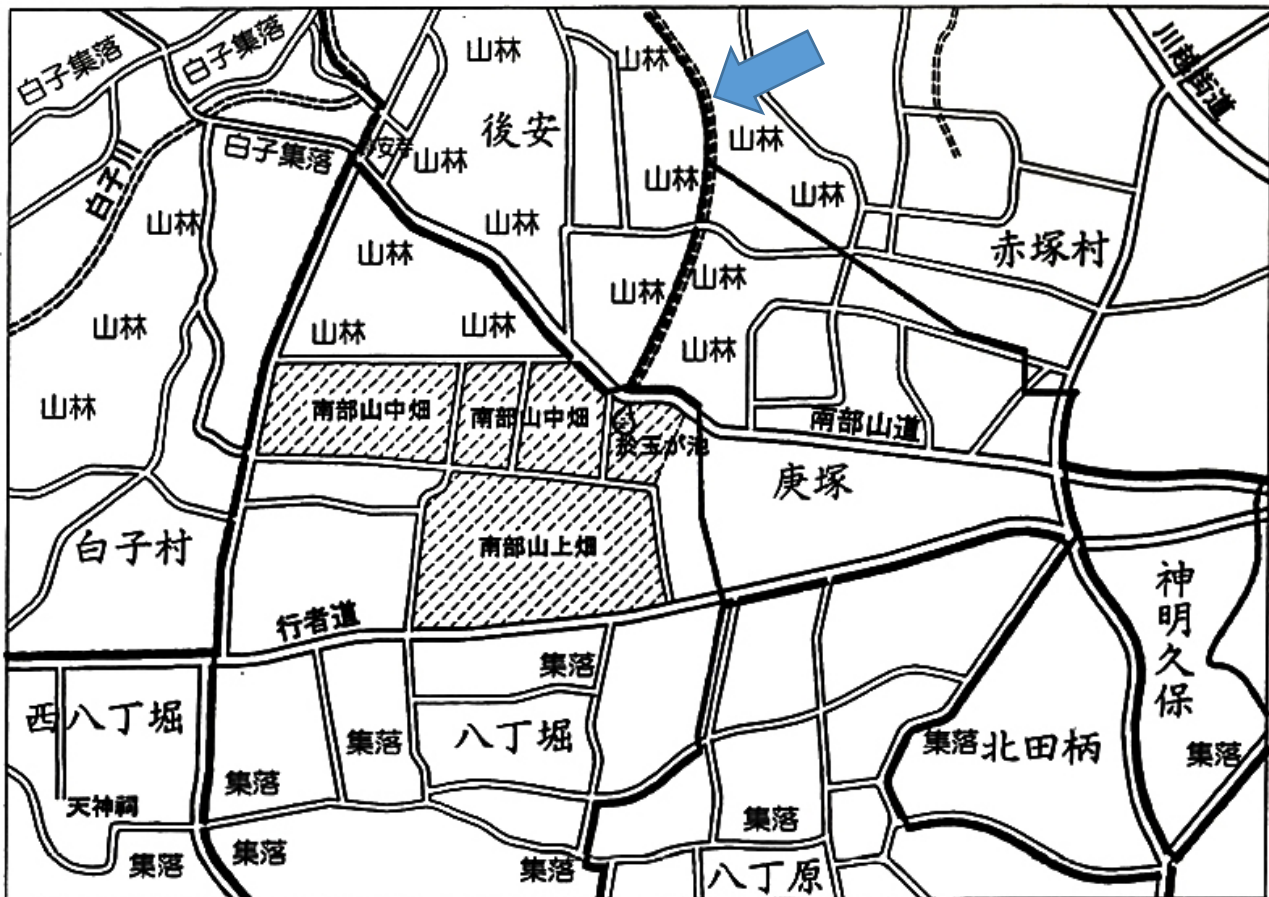
お玉が池

下の地図を見て、どの辺りなのか判別できますか。「赤塚村」「川越街道」「白子川」の地名を見付けたら、何となく見えてくるかもしれません。そうです。現在の光が丘公園北半分と旭町2丁目周辺です。



まず、分かりづらいですが、「於（お）玉が池」を探してください。ここが、光が丘公園の北口にある旧交番の位置です。今、この池は集中豪雨時などの一時降水貯留池になっています。と言いつつ、いまだかつてここに水が貯められているのを見たことはありません。その左側（西側）に広がる「南部」とは「南部藩（盛岡藩）」の抱え地（かかえち：放置したまま所有する土地）のことで、ちょうど現在の芝生広場が広がっている辺りです。ヒマラヤスギが群生している辺りと言えば分かりやすいのかもしれません。

ちなみに、この地の管理を任されていたのが相原家です。相原家とは、代々この付近一帯の「組頭（くみがしら）」を務めた豪農で、そのシンボルとも言える「相原家薬医門」（田柄5-8-3）が今に残っています。木部全体にベンガラ（当初は柿渋）が塗られていることから、「南部の赤門」と呼ばれています。「南部テニスコート」の北側です。これで、何故テニスコート名に「南部」という冠が付いているかお分かりになると思います。

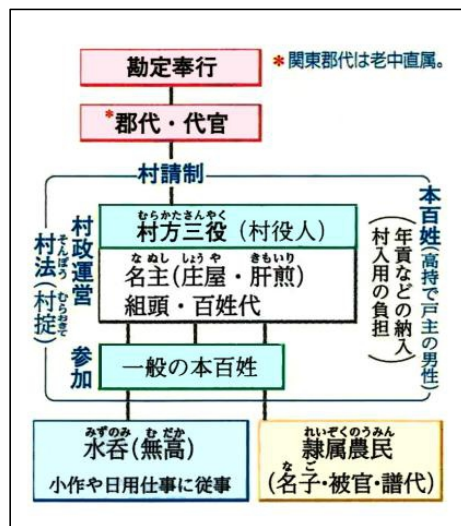


明治十三年陸地測量部迅測図

ここで、少し脱線しますと、農民の組織は村役人（村方三役）によって運営されていました。そのリーダーが、西日本では荘園を管理する屋形の意から「庄屋」と呼ばれ、東日本では名田（みょうでん：名付けられた荘園）の主であることから名主と呼ばれていました。この名田が大きくなって大名田→大名へと変化していくこととなります。つまり、彼らは武士の流れを汲む支配層ということになります。肝煎り（神経を使うの意）は主に東北地方での呼び名です。

相原家は「組頭」ですから、名主を補佐し実際の年貢の取り立てなどの役を担いつつも、農民支配層というよりも本百姓から選ばれた村人代表という位置付けになります。

さて、再度前ページの地図に話を戻しますが、これは明治13年の測量図をもとに書き直したものです。よく見ると、「お玉が池」から山



林の間を縫うように北上する点線が見えます。矢印の部分です。これから、お玉が池を源に白子川に注ぐ小川の流れがあったようです。現在は水路敷として暗渠化され、その多くが遊歩道となっています。この道を白子川まで、わずか1kmほどの距離ですが、散策してみたいと思います。が、残念ながら今号は紙幅の関係で、その詳細は次号に譲らせてください。

改めて、現在の地図を表記します。目印は交番のマーク（×）で、ここがスタート地点です。2007年以前は交番でしたが、現在は「光が丘公園地域安全センター」という名称です。



(次号に続く)